

## II 古代中国の金属製容器

### 1 器種名について

本研究で取り上げる漢代以降の古代金属製容器については、器種名を記したいわゆる自名の器が極めて少ないが、漢代の金属製容器には殷周銅器から変化したものが多いことから、それらに記された器種名を準用するのが一般的である。ただし、報告者によって幾分か混乱があり、整理しておく必要がある。

#### i 殷周銅器の概観

ここでは、1967年刊行の樋口隆康著『中国の銅器』（以下、樋口1967と称す）を基に、殷周銅器の器種名を再認識し、その消長も概観する。

樋口1967では、殷周銅器を、自名器を基に以下のように分類した（\*を付した器種は、殷周代だけに特有で、漢代以降のものと直接関わらないため省略した）。

##### A 食器

- I 煮炊器 <sup>テイ</sup>鼎、<sup>レキ</sup>鬲、<sup>ゲン</sup>甗・<sup>ソウ</sup>甑、<sup>フ</sup>釜、<sup>フク</sup>鍑（または<sup>キ</sup>錡）
- II 盛食器 <sup>タイ</sup>殷（または<sup>キ</sup>簋）、<sup>ウ</sup>盂、<sup>ホ</sup>簠\*、<sup>シュ</sup>盥\*、<sup>トン</sup>敦\*、<sup>トウ</sup>豆
- III 挹取器 <sup>ヒ</sup>匕

##### B 酒器

- I 盛酒器 <sup>ソン</sup>尊\*、<sup>ホウイ</sup>方彝\*、<sup>ジ</sup>兕觥、<sup>コウ</sup>卣、<sup>ユウ</sup>卣、<sup>コ</sup>壺、<sup>ホウ</sup>觥、<sup>ヒョウコ</sup>瓠\*、<sup>ヘイ</sup>觥、<sup>レイ</sup>觥、<sup>フ</sup>卣、<sup>ソウフ</sup>盥、<sup>ライ</sup>盥、<sup>ホウ</sup>甗、<sup>オウ</sup>甗
- II 温酒器 <sup>シヤク</sup>爵\*、<sup>カク</sup>角\*、<sup>カ</sup>觥\*、<sup>カ</sup>盃
- III 飲酒器 <sup>ゴ</sup>觥\*、<sup>シ</sup>觥\*、<sup>ジ</sup>耳杯、<sup>ハイ</sup>卣
- IV 挹注器 <sup>シヤク</sup>勺、<sup>ト</sup>斗

##### C 水器

- I 盤、<sup>バン</sup>匱、<sup>イ</sup>鑑、<sup>カン</sup>盆、<sup>ボン</sup>盆、<sup>セン</sup>洗

（中略）

##### F 雑器 鐘

それぞれの解説を抜粋すると、以下の如くである。

<sup>テイ</sup>鼎（脚付鍋） 鍋状の器に両耳をつけ、三足あるいは四足で支えたもの。豚や羊のほか、穀物も煮たらしい。殷・西周代では一般に青銅の蓋でなく、茅でおおったという。春秋期にはボール形の胴に蓋がつき、脚が蹄形となる。漢代に存続する。

<sup>レキ</sup>鬲（湯沸し） 鼎に似るが、脚が中空であり、物を煮るというよりも、湯を沸すのに適している。この上に蒸器をのせて、五穀やイモ、パンを蒸したが、鳥や豚を煮た可能性もある。戦国期にも盛んにつくられた。

<sup>ゲン</sup>甗（蒸器） 上の<sup>ソウ</sup>甑（こしき）と、下の<sup>レキ</sup>鬲（こしき）が一つづきに作られた器。東周以降になると鬲と甑が分離し、やがて<sup>かまど</sup>竈が発達すると、鬲の代わりに釜ができ、甑と組み合わせられて、新しい形式の蒸器となる。

<sup>ソウ</sup>甑（こしき） 蒸器の上半部のせいろである。戦国期のものが多く、すばまった底に小孔がいくつも透してある。

<sup>フ</sup>釜・<sup>フク</sup>鍑または<sup>キ</sup>錡 茶釜に似て口がすばみ、球形に近い形の炊器であるが、脚のないものを釜、三脚をつけたものを鍑または錡という。釜は竈の上にかけて、その上に甑をのせた。鍑は戦国期から漢代にかけて盛んにつくられた。

<sup>タイ</sup>簋または<sup>キ</sup>簠（鉢） 鉢形の器で、圈台（高台。圈足ともいう）のついているのを原則とする。把手がつくものとなないもの、蓋のあるものとなないもの、方台のつくものなどがある。殷から周末まで広く使用された円形の器である。字はもみがらと匕（さじ）の象形であり、穀類を盛ったものをいう。漢代には、『説文』のように、すでに簋と後述する<sup>ホ</sup>簠との混乱がある。

<sup>ウ</sup>盂（飯ちゃわん） 大口の深鉢で、圈足と両耳のついた形は、簋のあるものに似ているが、一般に大型で、耳は両脚が水平に器腹につき、中ほどで折れ上がるのが特色。殷から西周前期に限られ、それ以後はみない。東周代に後述する<sup>イ</sup>匱の器名に「<sup>ソウ</sup>盂」「<sup>ソウ</sup>飲盂」としたものがあり、この時期にはすでに盂が転用されるようになっていた。

<sup>トウ</sup>豆（高坏） 両環耳のある浅皿の下に、裾ひろがりの高足をつけたもの。黍（きび）や稷（高粱）を盛ったと解されるが、肉やスープ、カユなども盛った。銅器は西周晩期からであるが、この器はその後も長く用いられた。

<sup>ヒ</sup>匕（匙） 料理した穀物や肉をすくい取る匙である。先が尖り、柄に曲がったものと真っ直ぐなものがある。西周初期の自名器がある。

<sup>ユウ</sup>卣（酒壺） 基本的には、壺に提梁（釣り手）をつけたもので、蓋がついている。形は扁円壺、細壺形や<sup>ホウ</sup>甗形の円壺、筒形などバラエティに富む。殷から西周まで盛んにつくられた。

<sup>コ</sup>壺 酒や水を入れた器。長頸で、蓋、両耳、圈台がついているものが多い。すでに殷代から口頸部が幅広の豊壺と、頸部が強くくびれる細壺の2種がある。

<sup>ホウ</sup>觥（酒壺） 方形の壺。戦国期から漢代にかけてあった。

<sup>ヘイ</sup>餅（壺） 台のない平底の壺。古典によると「餅は小形で、常に大きな<sup>ライ</sup>疊から酒をうける」とある。春秋期に限られている。

<sup>レイ</sup>鑑（壺） 春秋期の自名器でみると、平底の小形壺で、肩が張り、口は外に反って短頸である。漢代の『説文』に「鑑は餅に似て耳あり」とあるのに一致する。

<sup>フ</sup>缶（壺） 自名器によると、球形に近い胴に、筒形の口頸と低い圈台がつく壺。蓋と胴に環耳をつけている。春秋・戦国期に限られる。

<sup>ソウ</sup>盥缶 高さより横が広くなり、口が広く頸がとくに短い点で、缶と異なり、むしろ次述する<sup>フ</sup>甗に近い。提梁がつき、蓋を伴う。手洗い用の水をいれたものと推定している。自名の器は春秋期のもの。

<sup>ライ</sup>甗（大甗） 大型の壺で肩が張り、頸は短く、両肩と下腹の三ヶ所に環耳がつく。酒や水を貯蔵する甗である。殷・西周代のものである。自名の器はなく、本来の器形ははっきりしない。

<sup>ホウ</sup>甗（甗） 甗に似るが、高さより横が広く、大口である。殷にあるが西周以後は消えていく。自名の器はない。

<sup>オウ</sup>匱 扁壺である。戦国期から漢初に限られる。

<sup>カ</sup>盂 筒状の注口と把手をもった器で、器形は鬲形と壺形とがある。前者は古く、後者は殷末・

## 1 器種名について

西周初にある。戦国・漢代には提梁をもった葉罐形で、三蹄脚をつけたものがある。

**耳杯**（さかずき） 浅い楕円形の長辺に、櫛形の耳をつけたものである。戦国期からあるが漢代に多い。「杯」「栴」「羽觴」の自名がある。さかずきとして酒をいれる以外に、羹（あつもの。肉と野菜のシチュー）を盛ったようで「羹栴」という銘がある。後漢の墓では鶏・豚の骨も入っていた。

**卮**（さかずき） 楕円形のフン小盃で、長い方の側面に環耳を二ないし三個つけている。東周代に限られる。自名の器はない。漢代の『説文』では「卮は円い器」とある。「舟」と呼ぶ人もいるが、『周礼』に「舟は尊（盛酒器）の承盤」とあり、あわない。羹を盛った可能性もある。

**勺・斗**（ひしゃく） 勺は瓠を縦割りにしたもの、斗は小さなコップ状の容器の腹部に柄がついたもの。

**盤** 祭祀や饗宴の前に、客人が手を洗うのがヨクセン沃盥の礼。そのとき、次述するイ匱で水をそそぎ、下に盤を置いて水を受けるのである。大きくて浅いお盆に、圈台と両耳をつけたのが一般で、内面に魚、鳥などの文様を配する。殷代にあり、漢以降にも存続する。

**匱**（水指し） 楕円形の器の前方に注口、後方に把手があり、底には四足をつけるのが一般で、時に三足あるいは圈台、平底のものもある。西周晩期から東周に限られる。蓋付きや平底の類は戦国期に多い。自名器があり、「匱」と呼ばれた。また、酒を注ぐ用にも使われた。

**鑑**（たらい） 大きな鉢形をした器で、圈台がつき、器側に両耳ないし四耳がある。春秋末期の器に自名がある。水浴に用いたり、氷とともに食物を入れて保存したり、水をいれて姿をうつした鏡の用もはたした。春秋以後と、戦国の交替期に多い。

**盆・銅**（鉢） 盆の自名器をみると、腹部に折稜があり、大口で、小さな平底の鉢である。口唇は広い水平帯をなし、両耳をつけている。東周代に限られる。古典によると、盆は鑑の小さなもので、犠牛の血を盛る特別な用途のほかに、盛水器や炊器などとして用いられた。漢代の『説文』は「小さな盆を銅という」。

**鑪**（火鉢） 長方形か円形の盤状器で、短い足が三ないし四個あり、器側に環や長い鎖がつく。自名器は隅丸方形。春秋期や漢代の例がある。

### ii 漢代以降の器種名とその用途（第1図）

幾分かまとまって自名器があるのは、前漢の前113年に没した河北・中山王劉勝墓（以下、満城M1）と、前118～104年の間に没した妻の墓（以下、満城M2）、前漢晩期の湖南・張璠君墓及び唐墓出土品などである。自名のない器種は、主に中国の報告書等で混乱している名称について、樋口1967や1976年の林巳奈夫『漢代の文物』（以下、林1976と称す）を勘案し、整理した上で用いることにする。以下、基本的には供膳具、貯蔵具、煮沸具、雑器の順に取り上げる。ただ、漢代には、沃盥の礼などに関わる水器が残り、供膳具と区分しがたいものもある。便宜上、水器を供膳具のところで取り上げる。

**高足杯・卮・曲長杯** 長い脚の付いたワイングラス状の杯を高足杯と呼ぶのが一般的である。身部が半球状のものも含めており、これに従う。卮は、樋口1967では環耳を持つ楕円体のフン小盃としているが、漢代以降の用例では円筒形で横に環状把手をもマグカップ状のものに使用している。<sup>註1)</sup> 混乱を避け、前者を把手付杯Ⅰ類、後者を把手付杯Ⅱ類と呼ぶ。これらのなかには量器

(櫛はかり)があり、注意を要する。

高足杯を壁画や画像石・磚などの資料(以下、絵画資料)で見ると、片手にもって口に運ぼうとする北齊から隋の諸例(第9図1・7・8、第10図1)があり、飲酒器とみて誤りがない。高足杯を下盤の上においた北魏例(第8図4)や手に捧げる唐例(第11図1)などもある。把手付杯らしきものを片手にもつ後漢例もある(第2図3・6)。

曲長杯のルーツは西アジアにある。これを両手あるいは片手にもって口に運ぼうとする絵画資料は、五胡十六国時代例(第8図)、隋例(第10図2・3)などがあり、飲器とみてよい。耳杯で飲もうとする南北朝後期例(第9図5)もある。

**杯・碗・鉢・酒罎** 杯・碗・鉢の自名器はないようである。これらは、通常は食器や飲器であり、環耳はなく、口縁が強く外折したり、あるいは強く内湾しないものに使用している。小型品を杯、中型品を碗、大型品を鉢と呼んでいる。高台のあるものもないものもある。南北朝頃からは小型品と中型品それに大型品とセットになって出土しており、口径10cm前後の小型品を杯、口径15cm前後の中型品を碗、大型品を鉢と、ほぼ呼び分けているようである。中国では、杯の一部のものを盞や盅と呼ぶ場合もあるが、ここでは用いない。杯には、器体が横長な長杯と呼ぶものを含む。日本・正倉院の八曲長杯のようなものと楕円形とがある。前者を曲長杯、後者を楕円長杯と称する。

絵画資料では、後述するように、杯か碗を盤にのせて運ぶ後漢～唐の諸例がある(第4図3、第6図1～3、第11図8)。そのうちの一つでは、後述する「温酒器」から勺で、托上の容器に掬い取ろうとしている後漢例(第4図3)がある。杯か碗を片手に持ち、口に運ぼうとする北周例(第9図10)も飲器である。小型品である杯の、少なくとも一部は飲酒器であった可能性は高い。後述する晩唐の「茶托」は大きさからみて、碗がこの上にあり、飲茶器として用いられたことがわかる。他方、碗や丸底の鉢か碗には、匕(匙)や勺(散蓮華)をいれたものが、後述するように、前漢早期、後漢中期や後期例、西晋例、隋例などにあり、羹・粥あるいは五穀の食器であったことを示す。

自名器は張瑄君墓の「酒罎」(第1図12)である。口縁が外反する碗形だが、口径22.4cm、高さ12cmと大きい。後述するように、この時期としては高い高台をもつのも特色である。飲酒器としては大きく、酒を一時的にいれるか、北宋代にみるように、注酒器を内に入れて温める器の可能性はある。『説文』は「甗は小盆」という。罎は、本来は酒専用ではなかったのかもしれない。

**鉄鉢形・盂・舟** 鉢の中で、体部が内湾気味のものを、日本の用語に従い鉄鉢形と呼ぶ。内湾の程度が強いものは、中国で通常用いている盂を採用する。盂は水盂と称されることが多い。

舟は、既述したように、『周礼』に「舟は尊(盛酒器)の承盤」とある。楕円形の器で、大小がある。後述するように、大型品では勺(杓子)の入っていた例があり、鉢のような用途が考えられる。端に1個の環状把手がつくものもあり、液体あるいはスープなどを一時的にいれたソースパンのような用途も考えられよう。大小を入れ子にした例からは量器との見方も出されている。

**甗・匱** 匱は鉢形に片口状の注口をつけたもの。自名器がある(文献43)。円形品は前漢代に多い(第1図10)。王振鐸の論文(文献301)では、『説文』に「匱は羹甗に似る」とあること



## 1 器種名について

から、甗は匱に似ているが、片側に注口ではなく把手をつけた器に比定。絵画資料には、片手で甗の把手をつかみ、他方の手に持った箸<sup>キョウ</sup>か筴で甗内の食べ物をはさんだ後漢例（第2図5）がある。王振鐸は煮芋をいれていたことも示した。

<sup>バン</sup>盤・<sup>モクバン</sup>沐盤・<sup>ヨクケン</sup>浴銅・<sup>タク</sup>托 盤と呼んでいるものには、口径15cm前後の小型品から60cmを超える特大品まである。特大品や大型品には、次述する沐盤や、食膳として用いた扁平な円案の他、絵画資料では肉などの食物を盛った前漢例（第3図5）や三国時代・西晋例（第7図2・6・8）、おそらく果物を盛った北周例や隋例（第9図10、第10図3・4）もある。中・小型の盤では、桃を盛った前漢例（第2図1）のほか、既述したように、1個の杯か碗をのせて主人に差し出している後漢以降の諸例（第4図3、第6図1～3、第11図8）、高足杯をのせた北魏例（第8図4）、などがある。北燕415年の馮素弗墓では銅杯をのせた銅盤（付図4-X5）が出土しているが、この盤内には低い凸帯があり、托と認定できる。

張瑞君墓の「沐槃（盤）」（第1図19）は、口径64cm、高さ13.5cmの特に大型の盤状品。口縁が水平状に折れて伸び、環耳がつく。高台もつく。体部に強い稜があるのは後で詳述するように漢代頃までの特色。自名から、手洗いの水を受けたもので、前述した匱と組み合う。沃盥の礼器である。後述するように、沐盤には口径30cm程のものもある。

前漢早期の江蘇・徐州楚王墓出土銀器（第1図11）も口径47.2cm、高さ11.4cmの特大品で、これには「浴沐銅」の自名がある。口縁下がくびれたのち、口縁が水平にのびるのが特徴である。満城M1の「常浴」も口径66cm、高さ19.5cmの特大品（第1図8）。徐州楚王墓例と器形は異なるが、一括して浴銅として取り扱うことにする。

唐代の銀器には、稀少例ながら「茶托」（付図11-Lb3）の自名器がある。「托」は台付皿で、内面に杯や碗の高台を承ける突帯（以下、承け台）がある。以下では、承け台のあるものによって托を用いることにする。承け台が細くて高いのは燈臺の台であるので注意を要する。南北朝頃からの小盤に碟の名称を使う人がいるが、盤との区別が難しく、ここでは碟を用いない。<sup>バン</sup>盆・<sup>ケン</sup>銅・<sup>セン</sup>洗 満城M1の「盆」（第1図1）とM2の「銅」（第1図2）は酷似した器形で、ともに口縁がわずかにくびれたのち外折し、体部上寄りに突帯がある。環耳がつき、低い高台をもつ。口径は前者が29.3cm、後者が27.8cm、高さは前者が12.5cm、後者が12.5～12.8cmで、ともに容量は当時の「三斗」。漢代の『説文』に「小盆を銅という」が、満城漢墓例では区分できない。林1976では、平底で、体部がほぼ直に外傾して口縁で水平に外折する器形に「銅」の自名器がある。漢代には多い器形であり、これを以下では銅とし、盆の器形は満城漢墓の「盆」「銅」のように口縁下でくびれるものとしておく。

盆は、後述するように、釜・甗と一具と明記した例があり、蒸した穀類や芋などを盛ったと推定される。絵画資料だと、盆に似た大型品に勺を入れ、傍らに食物を盛った容器を置いた例があり、参考となる（第2図6）。『通鑑紀事本末』には玄宗が「銀淘盆」を賜う（文献16）とあり、米をとぐことなどにも用いられた。林1976によると、盆は水や屠殺した動物の血も入れた。銅とする器形は、絵画資料だと、箸が置かれた後漢例（文献13）、宴会の食膳脇に置かれた後漢末の例（第4図3）がある。動物の血をうける後漢例（第3図5）や西晋例（第7図5・9）や炊事用の後漢例（第3図5、第4図4、第5図4）もあり、用途は盆に類した点もあったと推測できる。

洗は、『儀礼』によると、士冠礼や士婚礼に「設洗」の儀があり、その注に「洗は盥で洗った汚水を捨てるための器」とある。張瑞君墓の刻名がある器（第1図14）は、上述の銅に酷似するが、体部は内弯気味で、口縁が上向きに折れて伸びる点が特徴。刻名を報告書では「洗」とみたが、林1976では「汗」とみて盃と理解している。樋口1967によると、盃は殷周代には円形の飯じゃわんで、水をいれる器にも転用されたという。張瑞君墓例は、水を受けるに適した器形であり、中国でも洗を通用していることから、これに従う。なお、張瑞君墓ではミニチュアの銅製小洗と小壺（付図1 - N8・2 - N3）があり、文様の一致から、これらが一具であったと推測できる。樋口1967では、洗は漢代に限られるという。

<sup>トウ</sup>豆・高足盤 日本の高杯にあたるもの。南北朝後半頃からは、高足盤の名称も使われているが、以下では豆を用いる。周代には穀類やスープ・粥などを盛った食器（樋口1967、林1967）であり、それにふさわしく蓋のつくものもあったが、戦国期に有蓋豆はすたれ、無蓋豆のみが残る。絵画資料には、食物、おそらく果物を盛った北周例（第10図1）がある。隋代の大形豆（高足盤）には多数の杯をのせた出土例があり、器台としても使用された。

<sup>ゴウ</sup>盒 蓋を伴う円筒状や碗形のもので、遅くとも戦国期にはある。前者は、化粧材などをいれた漆器が主で、唐代には銀器の自名器（文献16）もある。後者のうちで、身の口縁端に蓋受けをつくるものは盒としても、それ以外は蓋を伴う碗とすべきで、以下では碗で取り扱う。盒には酒や粥をいれたものがあり、丈の高い円筒形容器は「簞」で飯を盛ったという（文献13）。盒というより蓋付の罐とすべき、前漢の大型の陶製容器には「飯」と墨書する（付図2 - Ua5）ものがある。おひつである。大型の碗形盒や大型の蓋の付く碗や鉢にはおひつになる可能性があることは、注意すべきである。

扁壺 樋口1967によれば<sup>オウ</sup>區だが、漢代のものに<sup>註2)</sup>棹を用いる人もいる。だが、中国でも一般的なのは扁壺であり、これに従う。

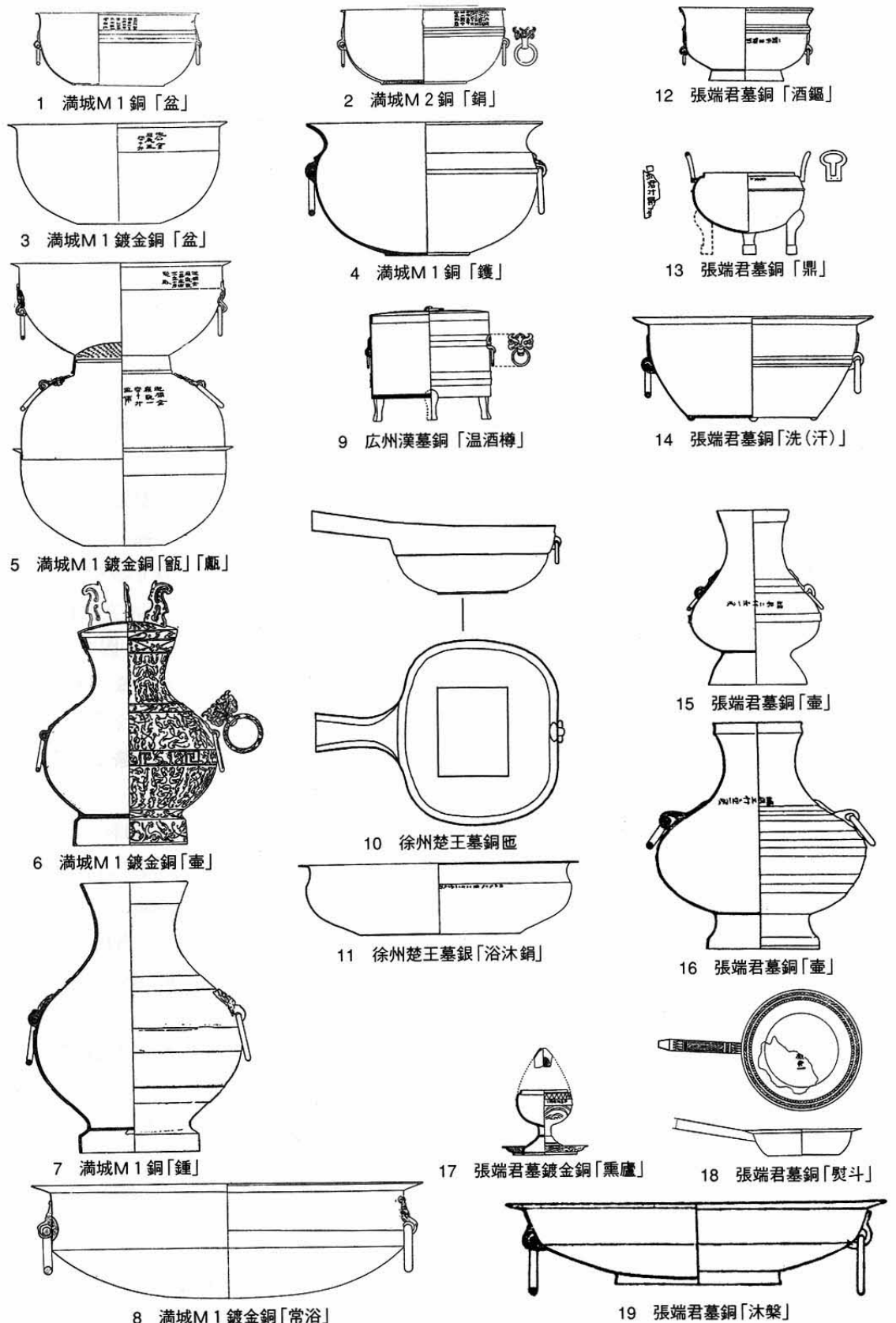
壺・<sup>ショウ</sup>鍾・<sup>グ</sup>唾壺 自名器は満城M1の「壺」（第1図6）と「鍾」（第1図7）、張瑞君墓の「壺」（第1図15・16）だが、相似た器形で区別できないことから、壺を通用する。壺のうちで、丈が低く、口が大きなものは唾壺を用いるのが一般的である。左手に壺状の提梁罐、右手に角杯を持って運ぶ初唐例（第11図2）は、そのなかに酒の入っていたことを示そう。漢代の出土品で、壺に「米」「豉」と墨書（付図2 - Ua3）があり、酒や水だけでなく穀類やみそなどもいれていたことがわかる。

細頸壺・<sup>ヘイ</sup>瓶・<sup>ケン</sup>投壺 頸の細長い壺と瓶の区別は、中国でも明確ではない。日本の自名器などから、胴部の形状の差異に関わらず、頸が極めて細長いものを瓶とする。従って、中国で<sup>サン</sup>蒜頭壺と称しているものや<sup>ケン</sup>鉞（長頸壺）と称しているものも瓶とし、頸が長くても太い細頸壺とは区別する。

絵画資料でみると、瓶は北魏や隋代の石窟で菩薩が手にもつ例（第10図6）や、供養者が盤（浅い洗）に瓶をのせて運ぶ例（第12図2・3）、中・晩唐の石窟で坐した僧の傍らの木に網袋状に入れて吊した例（第12図6）などがある。水瓶である。花を挿し込んだ北齊や北周例（第9図2・6）や晩唐例（第12図8）などもある。細頸壺は、矢投を楽しんだ投壺が後漢例（第2図4）にもあり、注意を要する。

注壺・把手付注壺 壺ないし瓶に注口・把手をつけたもの。把手付で片口をもつものは、高足

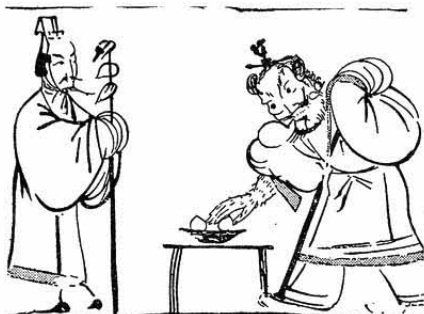
# 1 器種名について



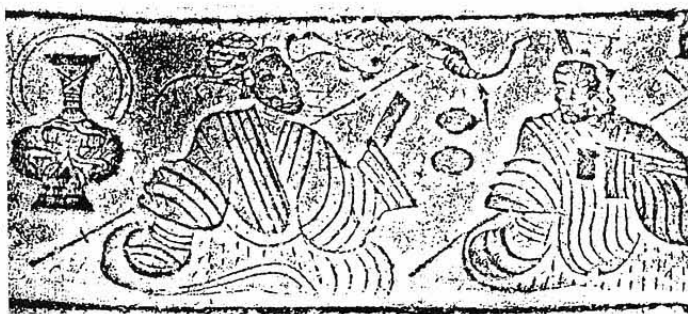
1~8 河北・満城M1（前113年）及びM2（前118~104年頃 文献3）  
 10・11 江蘇・徐州楚王墓（前漢早期 文献433）

9 広東・広州漢墓（前漢早期 文献4）  
 12~19 湖南・張端君墓（前漢晚期 文献70）

第1図 前漢の自名金属器 1:10



1 河南・洛陽壁画墓  
(前漢晚期 文献217)



3 日本・東京大学所蔵画像磚  
(漢代 文献38)



2 山東・金雀山出土帛画  
(前漢晚期 文献331)



4 河南・南陽出土画像石  
(漢代 文献525)



5 山東・武氏祠画像石  
(後漢 文献301)



6 四川・成都出土画像磚  
(後漢 文献49)

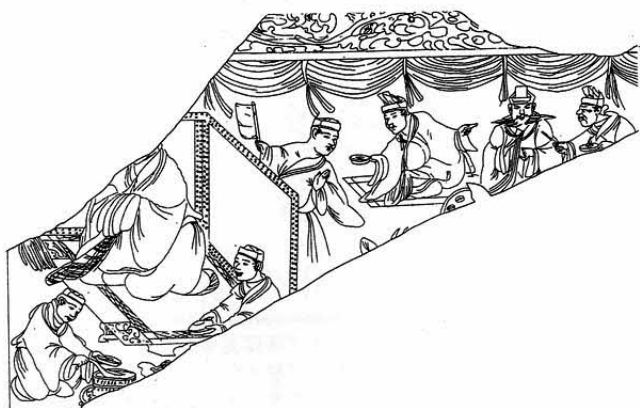


7 四川・成都出土画像磚  
(後漢晚期 文献49)

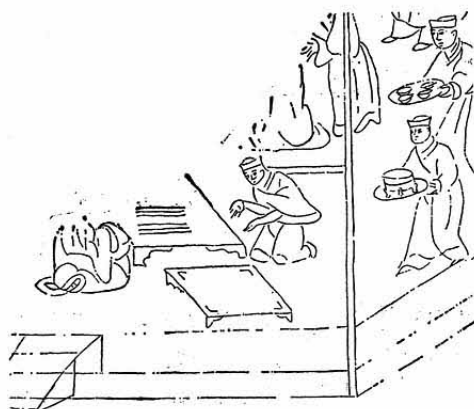
第2図 絵画資料1 前漢・後漢の壁画・画像石等



# 1 器種名について



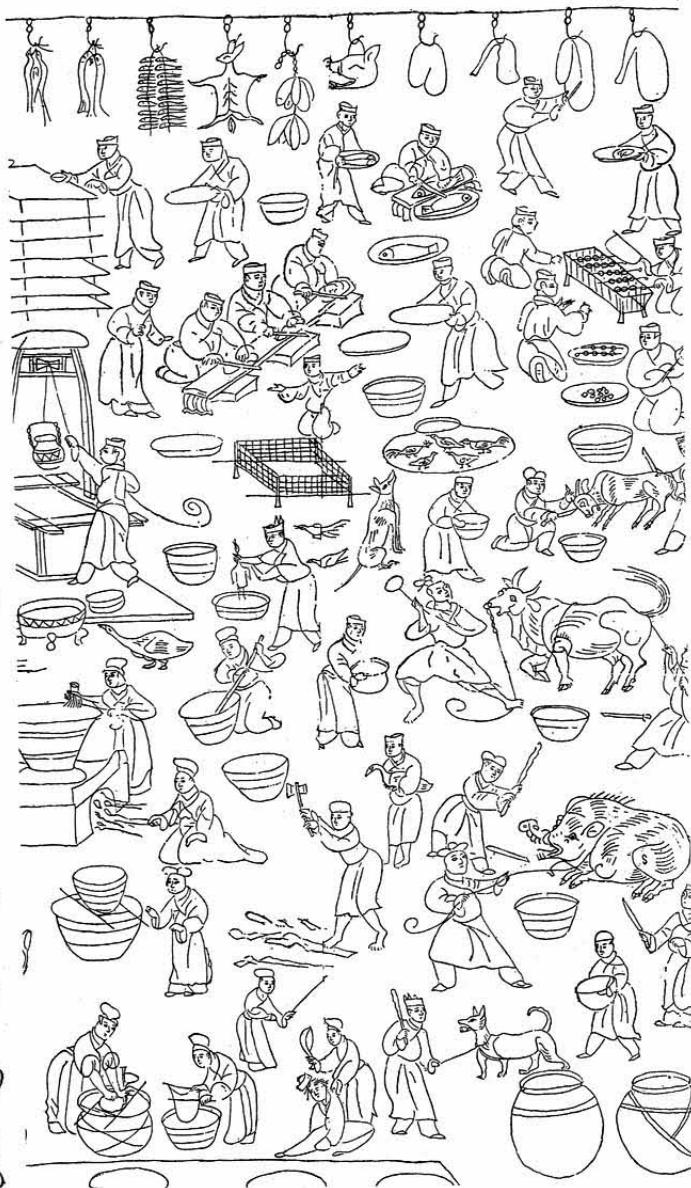
1 河南・淮陽画像石墓  
(120年頃 文献388)



3 山東・諸城画像石墓  
(後漢晚期 文献45・524)



2 山東・沂水画像石墓  
(後漢 文献15)



4(左)・5(右) 山東・諸城画像石墓 (後漢晚期 文献45・524)

第3図 絵画資料2 後漢の河南及び山東の画像石墓





1 地主収租図



2 執燈對話図



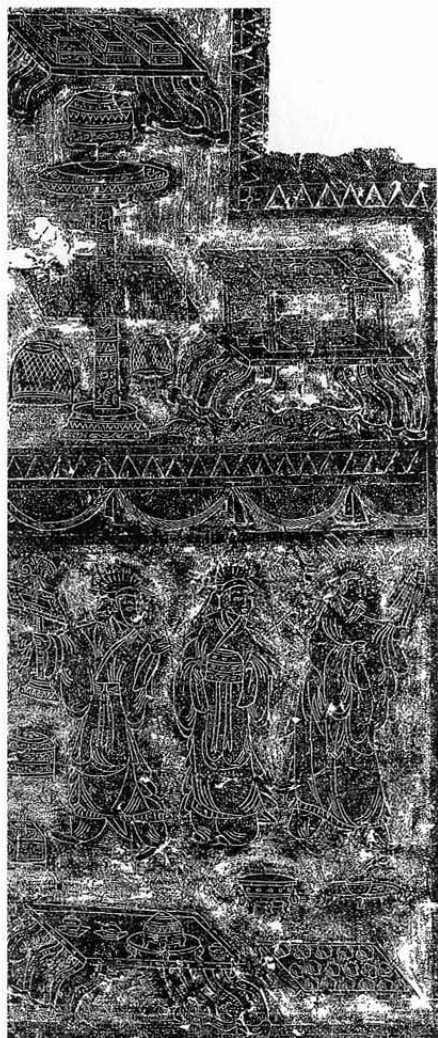
3 宴飲図



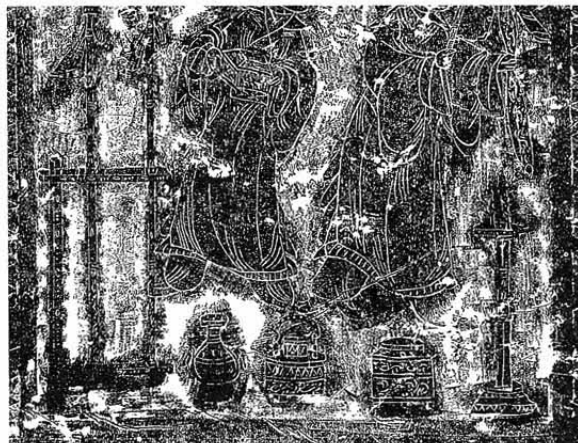
4 庖厨図

第4図 絵画資料3 河南・密県打虎亭画像石墓（後漢晚期 文献313）

1 器種名について



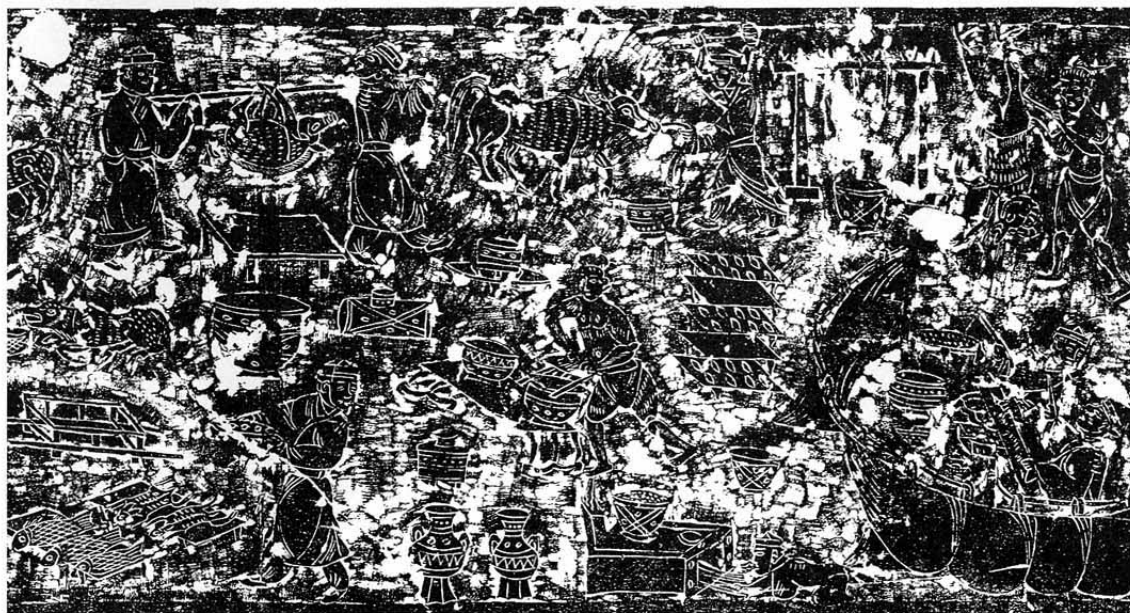
2 食膳・器財図



1 器財図



3 進講・宴会図

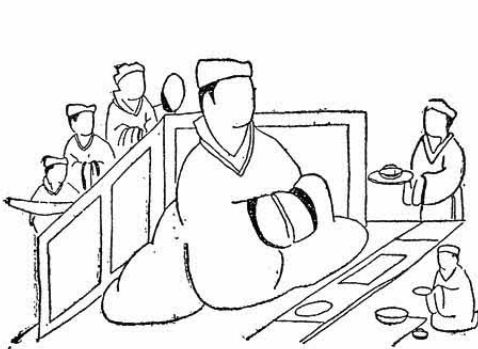


4 庖厨図

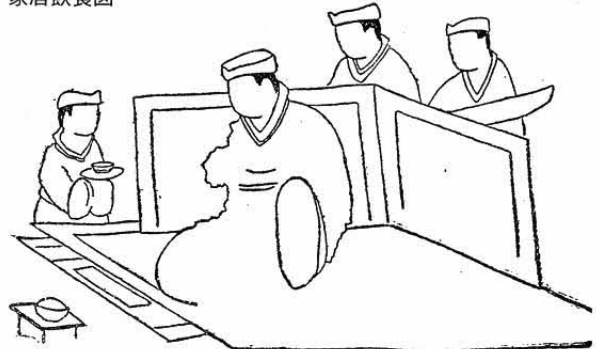
第5図 絵画資料4 山東・沂南画像石墓（後漢末頃 文献10）



1 家居飲食図



2 飲食図



3 飲食図



4 家居図



5 庖厨図(汲水)



6 樂伎図

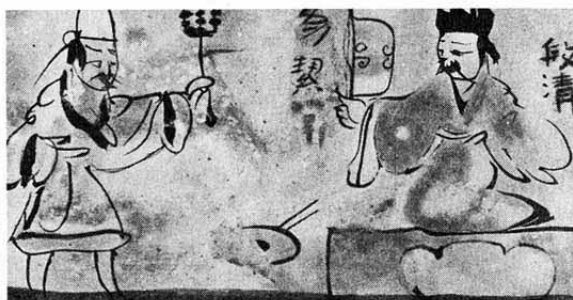
第6図 絵画資料5 遼寧・遼陽壁画墓(後漢晩期頃 文献278・497)



# 1 器種名について



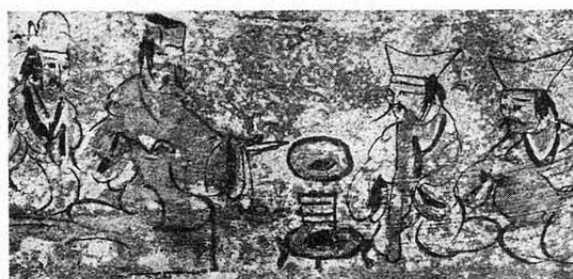
1 汲水図 (257年力)



2 宴飲図 (257年力)



3 庖厨図 (257年力)



4 宴飲図 (257年力)



5 宰猪図 (西晋)



6 進食図 (西晋)



7 進食図 (西晋)



8 宴飲図 (西晋)



9 殺鶏図 (西晋)



10 進食図 (西晋)

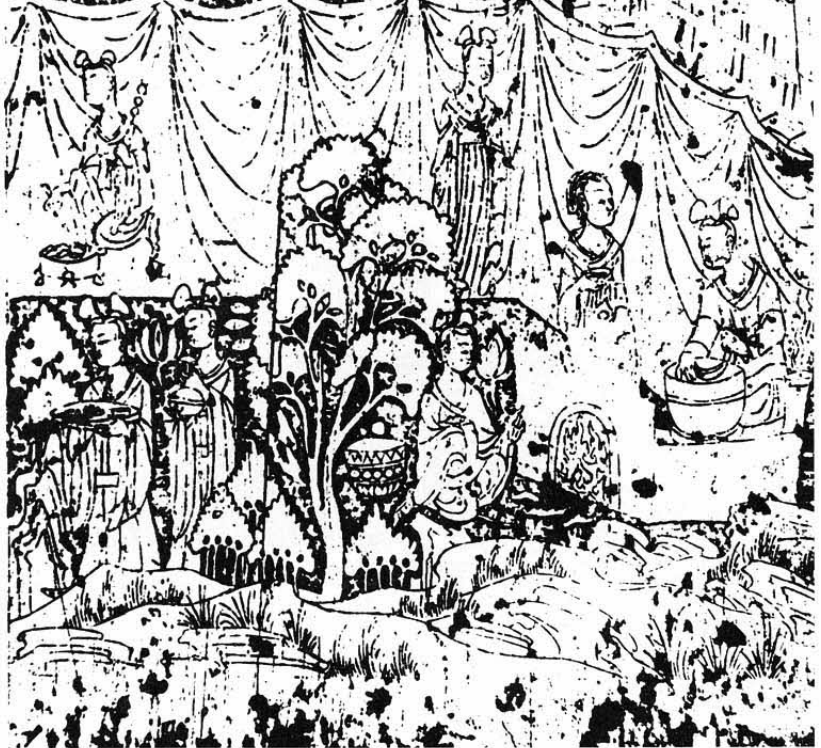
第7図 絵画資料6 甘肅・嘉峪関画像塼墓 (三国時代～西晋 文献17・315)



1 新疆・庫車石窟壁画  
(4世紀 文献186)



2 山西・大同石柳壁画  
(北魏5世紀末 文献456)



5 河南・甯懋石室刻画  
(501年 文献14)



3 河南・龍門石窟彫像  
(6世紀末 文献40)



4 孝子伝石棺刻画  
(522年 文献39)



6 河南・甯懋墓石室刻画  
(501年 文献14)

第8図 絵画資料7 五胡十六国時代～北魏の壁画・石刻画等



# 1 器種名について



1 山東・益都画像石墓  
(北齊573年 文献354)



2 山東・臨朐画像石墓  
(北齊 文献466)



3 陝西出土仏座線刻画  
(北周 文献285)



4 陝西出土仏座線刻画  
(北周 文献12)

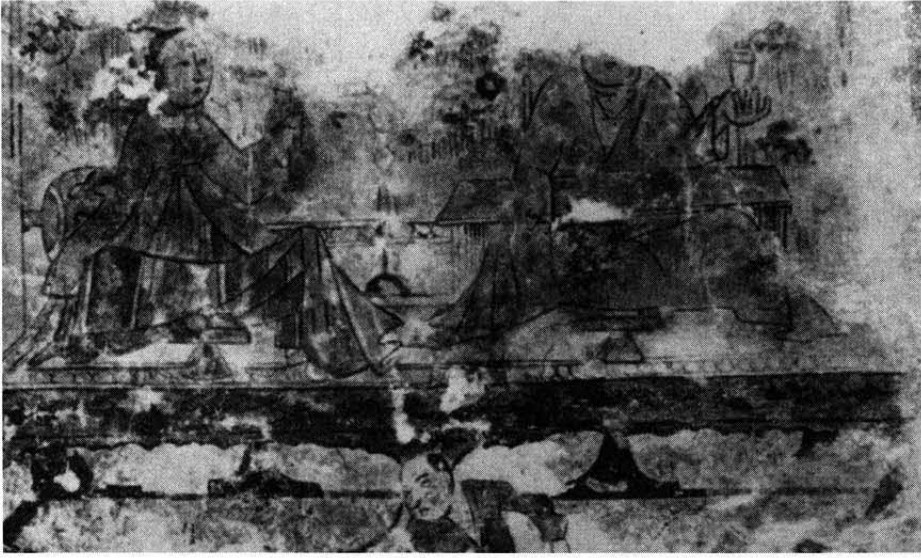


5 南京・西善橋磚室墓  
(南朝後期 文献14)



6~10 西安・安伽墓石門・石榻屏刻画  
(北周579年 文献36・449)

第9図 絵画資料8 南北朝後期の石刻画等



1 山東・徐敏行墓壁画 (隋584年 文献338)



2~4 山西・虞弘夫婦墓石棺刻画 (隋598年 文献449)

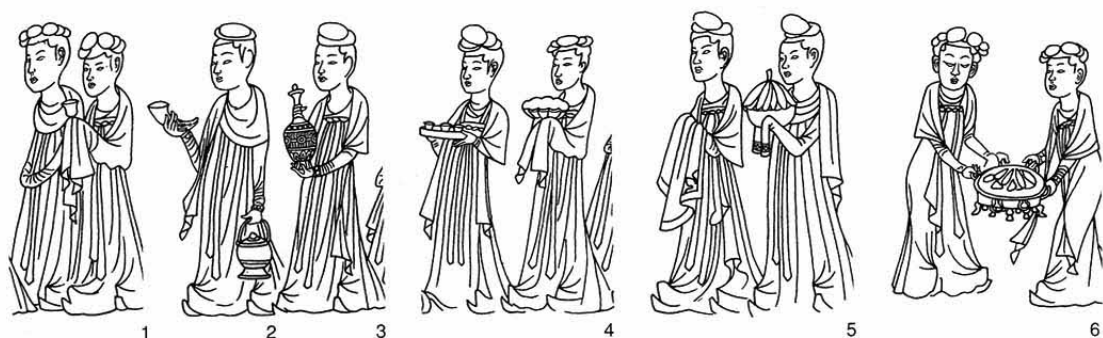
5 甘肅・天水墓石屏刻画 (隋~初唐 文献151)



6(左)・7(右) 敦煌・莫高窟第276窟壁画 (隋代 文献44)

第10図 絵画資料9 隋代の壁画・石刻画等

1 器種名について



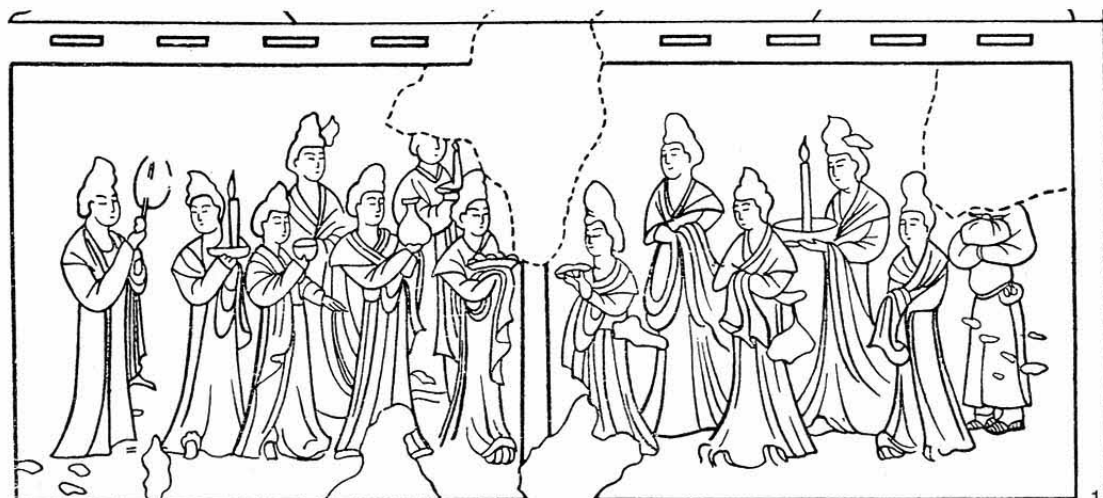
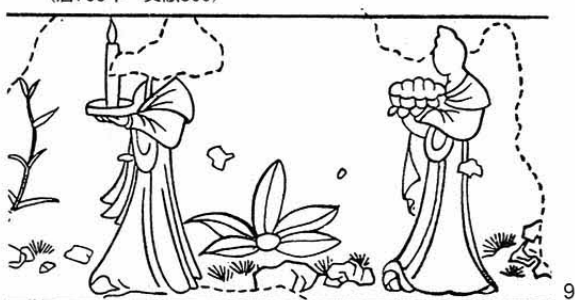
1～6 陝西・李壽墓壁画（唐630年 文献421）



7 陝西・永泰公主墓壁画  
（唐706年 文献300）



8 新疆・西州出土絹絵（唐8世紀前半 文献324）



9～11 陝西・懿德太子墓壁画（唐706年 文献81）

第11図 絵画資料10 初・盛唐の壁画等





四川・広元千仏洞彫像  
(唐710年～712年 文献379)



2 敦煌・莫高窟壁画  
(8世紀前～中頃 文献421)



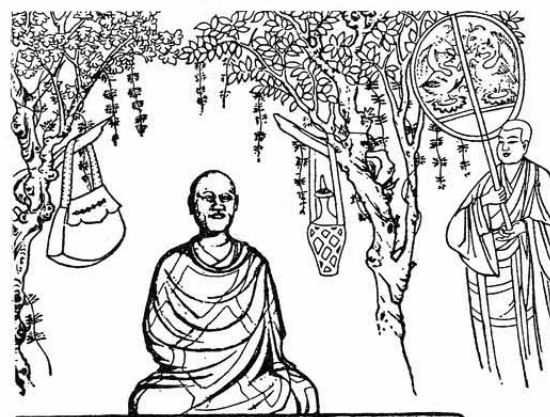
3 敦煌・莫高窟壁画 (8世紀前～中頃 文献14)



4 河南・慶山寺塔地宮壁画  
(唐741年 文献484)



5 河南出土銅鏡背文  
(唐784年 文献283)



6 敦煌・莫高窟藏經洞壁画・彫像  
(中・晩唐 文献332)



7 同左藏經洞出土紙画  
(晩唐力 文献332)



8 陝西・法門寺地宮壁画  
(唐874年 文献370)



9 “宮楽図”,  
(原画9世紀前半 文献14)



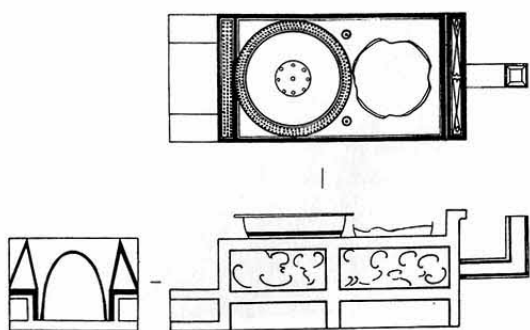
10 “搗練図”,  
(原画唐代 文献14)



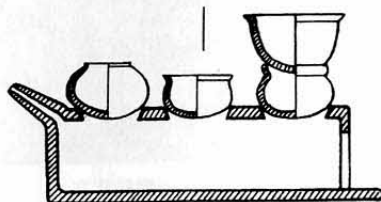
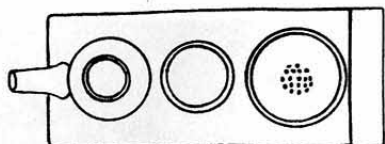
11 河北・王処直墓壁画  
(五代923年 文献423)

第12図 絵画資料11 盛・晩唐～五代の彫像・絵画等

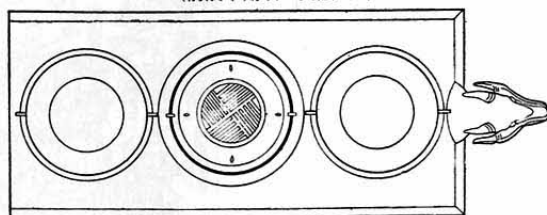
1 器種名について



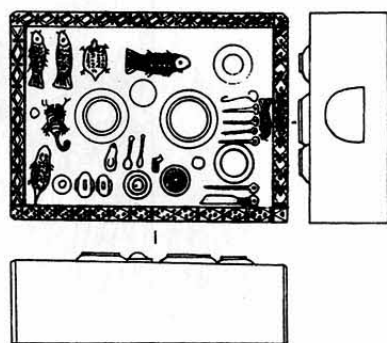
1 江蘇・徐州出土陶竈（前漢早期 文献426）



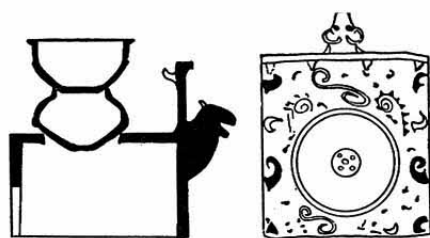
4 広東・広州出土陶竈  
（前漢中期頃 文献207）



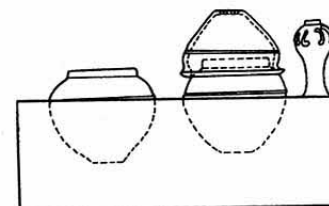
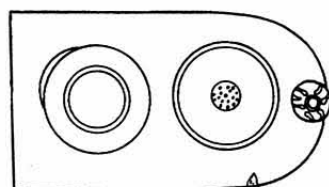
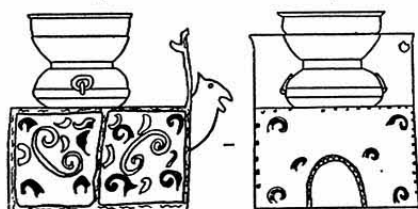
6 広西・合浦出土銅竈  
（前漢晩頃 文献75）



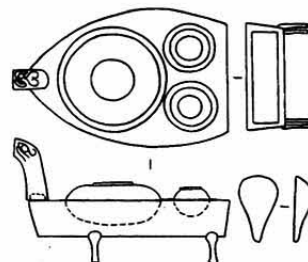
8 河南・洛陽出土陶竈  
（新代 文献403）



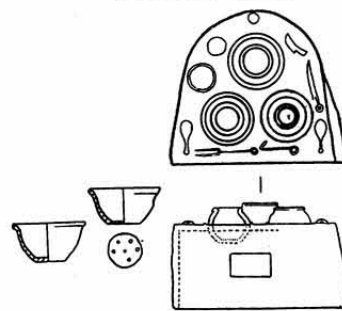
2 湖北・宜昌出土陶竈  
（前漢前期 文献218）



3 陝西・景帝陽陵從葬坑出土陶竈  
（前漢早期 文献397）



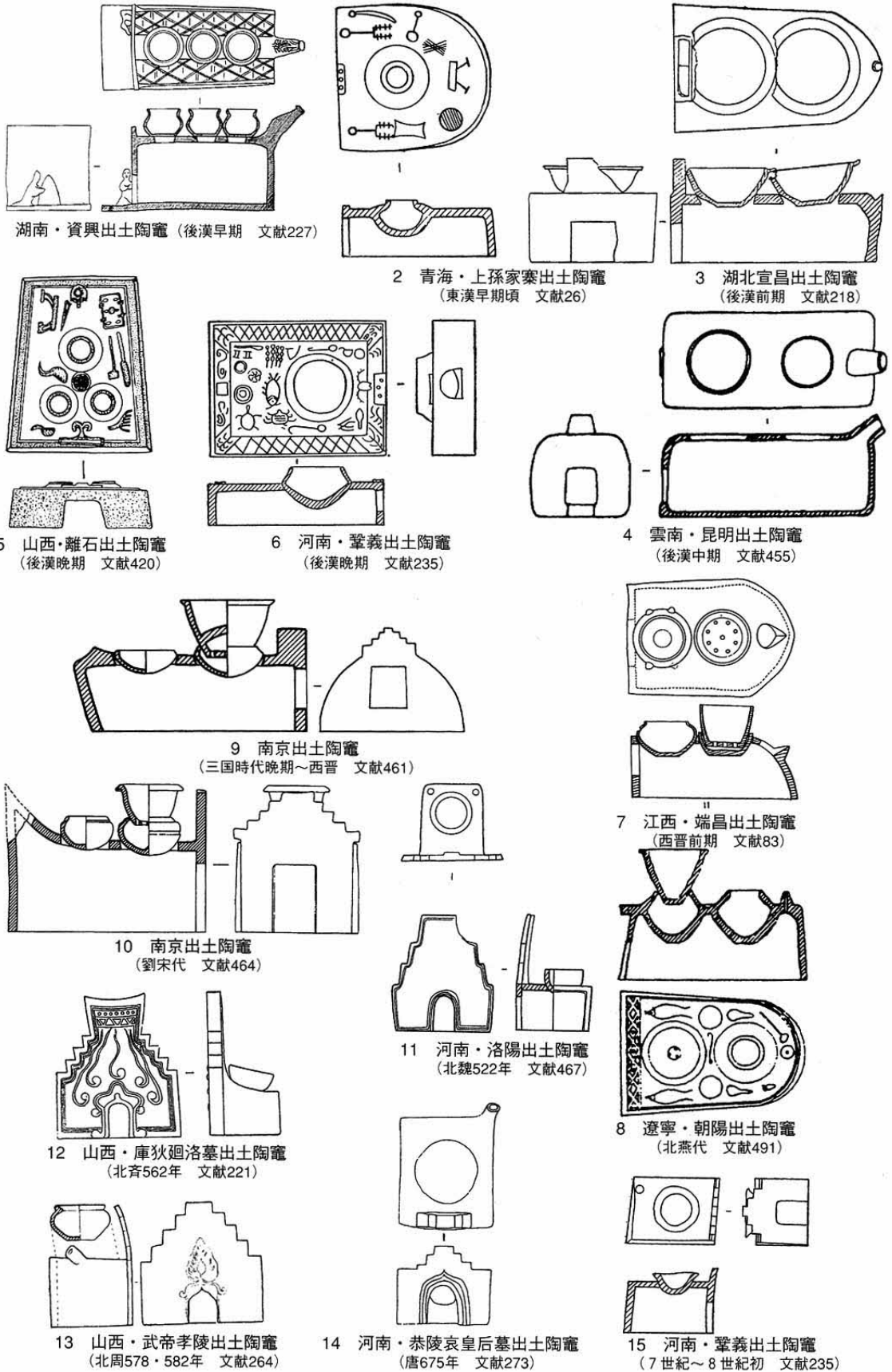
5 内蒙古出土銅竈  
（前漢中期頃 文献30）



7 内蒙古出土陶竈  
（前漢晩期 文献30）

第13図 前漢・新代の竈 1:8 (6のみに10)





第14図 後漢～唐代の竈 1:6

## 1 器種名について

杯を持つ人の前に置かれたり、右手に高足杯を持つ人が左手に吊げている北周例（第9図8）があり、注酒器とみてよい。ワイン用らしい。肩に筒状の注口を付けた把手付注壺は、後述するように「茶杜瓶」や「酒注」の墨書や刻名があり、茶用と酒用とがあったことがわかる。

**銚壺** ショウコ 殷周代の温酒器である盃<sup>カ</sup>には、薬罐形があった。これは戦国晩期になると、器腹の一方に把手がつく急須形に変化する。このタイプを銚壺と呼ぶことが多い。樋口1967の指摘のように「銚」は銚斗にあてべきだが、慣例に従う。

**罐・甕・甗・瓮・罍** カン ライ ホウ オウビン 日本でいう甕類や一部は壺類も含めて、中国では罐と総称しており、バラエティに富む。殷周銅器の系譜をひく器形は甕、甗を用いる。罐は比較的口の大きなものに限られ、口が小さなものは壺や罍として取り扱う。唐代には「酒瓮」の自名銀器がある。短頸で肩が張った器形である。瓮は甕の簡略字。絵画資料には、罐を2本の木組みの上にのせて井戸に向かう三国時代例（第7図1）もある。『通鑑紀事本末』によると、玄宗が「金飯甗」を賜ったとある（文献16）。甗は甕類の総称でもあり、特定の器形ではないようであるが、その一部がおひつに用いられたことは注目される。罍は罐の中でも口が小さなもの。後漢のところで触れるように「甗」の自名（付図5-I ai）がある例もあるが、日本の自名器とはそくわないので、中国でも一般に用いている罍に従う。

**釜・甑・甗・鍋** フ ソウ ゲン カ 自名器は満城M1の「甗」「甑」一組（第1図5）とこれに備えていたことを明記する「盆」（第1図3）の一具である。甗は甑を備えたものであり、茶釜状を呈する下半部は通例に従い釜とする。鏝のないものもある。大口で無頸壺のようなものや、甕に近いものもあるが、底に火をうけているものがあり、釜として扱う。

満城M1・M2の報告書では、他の報告書等と同様に、半球状の器で、口縁が外折する丸底の器も釜としているが、混乱を避け、鍋と称する。比較的小形のものでも底に火をうけた例がある。環耳があるものと、ないものがある。鍋に脚がつくものを三脚鍋と呼ぶが、浅いものは爐であるので注意を要する。

**鑊・鑊** カク ボウ 自名器は満城M1の「鑊」（第1図4）。環耳があり「盆」「鍋」に似た器だが、口径41cm、高さ22.5cmの大型品で、頸部が強くくびれている点で異なる。低い台が付くが、『説文』によると、鑊は煮るための器になる。鍋の一種だが、類例は少ない。

鑊と呼んでいるのは、壺に似るが、口が大きく、肩に1個ないし2個の環耳がつく。底に火をうけている。自名器がある（文献43）。主に中国南部で出土している。地域色を考慮して、この名称を使用する。

**鼎・銚斗** テイ ショウト 自名器は張瑞君墓の「鼎」（第1図13）。蓋の報告はないが、身の口縁の形状から、もとはあったと推測できる。鼎には蓋受けのないものもある。鍋状の容器の底部に三脚、腹区部に1本の長い把手が付くものを一般に銚斗と称している。『説文』の廣韻注に「温器なり。三足にして柄あり」というのにあたる。自名器もある（文献43）。注口の付いたものもあり、液体を温める温器でもあった。

**鑊** フク 鑊は、樋口1967では三脚の釜だが、『説文』では「大口釜」とあり、混乱している。以下では五胡十六国時代や、北魏代の出土資料で、把手付の深鍋形を鑊と呼ぶに従う。三脚付の茶釜形は釜として取り扱う。

**温酒樽・壺・銚尊** ソン レン ショウソン 壺は円筒形の器で三脚が付くものもある。漆器の場合は、化粧用品をいれ

たことがあきらかであるが、漢代の金属製容器には「温酒樽」の自名（第1図9）がある。三脚付の盤を伴うことが多い。絵画資料は後漢や魏晉の諸例があり、勺を伴うことが多い（第2図4、第3図3・4、第4図3、第5図4、第7図4）。林1976によると、羹をいれたこともあった。だが、後漢の絵画資料（第3図4、第4図3）だと、温酒樽と、中国で鑊尊と呼んでいる三脚壺がセットで描かれており、それぞれが酒、羹類の専用温器と推測する。

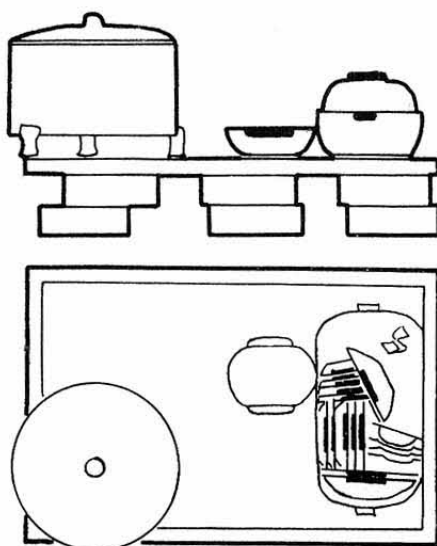
**竈・架** 竈は、陶製が主だが銅製もある。明器が多いが、釜や鍋を備え、勺や箸、叉などを配した例があり、参考となる（第13・14図）。架は釜、鑊、鍋をこの上に置いて煮沸したもので、釜、鑊の底について出土した例がある、

**案・案** 案は食台あるいは食膳。扁平なつくりで、方形と円形とがあり、それぞれ2ないし4個の脚のつくものとつかないものがある。案は方形で、円形は椀（文献43）だが、通例によって方案、円案と呼ぶ。方案は前漢、円案は後漢から出土例があり、複数の耳杯や、杯、碗あるいは小形盤を上におく（第4図3、第6図6第15図1・2など）。北魏で触れるように、円案上に瓷杯5個と銀製盤状高足杯1個それに銀製小瓶と金製小鑊斗各1個をのせた北魏例もある。

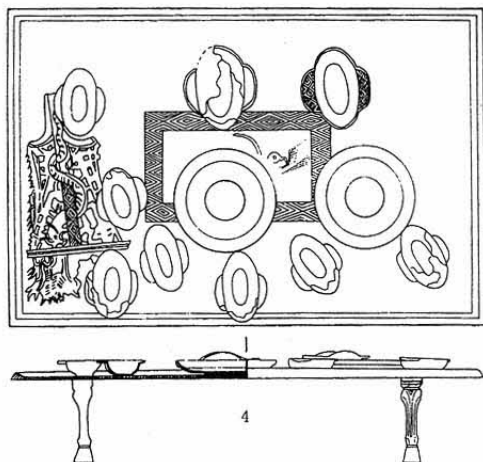
絵画資料も後漢からの例が多く、宴会では主人が方案上に器物を並べた円案（第15図3）、他の人は円案という状況が窺える（第4図3、第5図1）。円案や方案上では、実際に箸（箸）や勺、匕が杯や碗とともに置かれた資料（第3図2・3、第6図6、第7図2・8）などがある。

案と呼んでいるのは、複数のおそらく杯をいれた容器である。円案に比してやや深目で、蓋受けがあるものもある。日本で茶器をいれる容器に似ている。

**匕・勺・斗** 匕は匙で、主に食事具。勺と斗は、酒や水あるいは羹やスープなどを大型容器からすくい取るもの。円形もしくは楕円形の浅目の



1 洛陽・五女塚出土陶案（新代 文献418）



2 雲南・昆明出土銅案（後漢中期 文献455）



3 洛陽・朱村壁画墓案（後漢晚～三国時代 文献402）

第15図 新～三国時代の案 1・2 1:10

## 1 器種名について

容器に斜めに柄がつくのを勺、円筒状の深目の容器にほぼ直角に柄がつくのを斗と呼び分けている。瓢を縦割りにしたいわゆる散蓮華形も勺と呼んでいるが、後漢から盛行する小型品（以下、とくに散蓮華と称す）は、羹や粥やスープを食べた可能性があり、注意を要する。

筷・筴・叉 <sup>カイ</sup> 筴は箸、火箸もある。筴は細板を曲げて挟むようにしたもの。食事具以外に火鉢もある。叉はフォーク状品。小型品は食事用だが、大型品は肉を刺して調整したり串焼きに用いた（第7図2・8）

熨斗・薰爐・燈 <sup>ウツト</sup> 自名器は張瑞君墓の「熨斗」（第1図18）と「薰爐」（第1図17）。熨斗は北魏の太和3年（479）銘の例では柄が長く、透かし彫りのある蓋がつき、柄を差し込んでおくスタンドもあることから、ひのし（アイロン）にふさわしい（文献41）。唐代とみる絵画には張った布に熨斗をあてている（第12図10）。柄の短いものは把手付鍋とする説がある。張瑞君墓例は柄は短い、中空であり、木柄を差し込んだもの。鍋か熨斗かは、底が丸底か平底かに拠ろう。

「薰爐」はいわゆる博山爐と呼ぶ薰爐（香爐）である。薰爐は、前漢代には博山爐以外にもいくつかのタイプがあり、バラエティに富む。三国時代頃からは次第に種類も出土量も減少する。「燈」は動物脂の膏や蠟燭を燃した燈火器（以下、燈）。漢代の自名器がある。これもバラエティに富む。絵画資料には、蠟燭をつけた燈は後漢例（第5図1）や盛唐例（第11図9・11）などがある。

第2～4節では、原則として、供膳具（水器の一部を含む）、貯蔵具（注器を含む）、煮沸具、雑器の順に、時代によってどのように変遷したかをみる。

### iii 研究略史

殷・西周銅器は中国内外の研究が多く、東周（春秋・戦国期）銅器の研究も少なくはない。だが、銅器がまだ多い漢代については、後で触れるように、河北・満城漢墓や広東・広州漢墓などのように個々では詳細な報告があるものの、前漢あるいは後漢に中国の広い範囲で銅器の諸器種・器形がどのように変遷したかを提示した研究は見当たらない。金属製容器が概して少ない三国時代～隋代では、総括的な論功はない。銀器や鍍金銀器が盛行する唐代では、後述するように韓偉らによる『唐代金銀器』などがあり、それらの成果を基に研究が進展している状況にある。

漢代 主に銅器を対象とした論功では、既述した1976年の林巳奈夫『漢代の文物』が史料と考古遺物の両面から、器名と器種・器形を総括的に研究したほぼ唯一のもの。他に1985年の李陳奇「蒜頭壺考略」（文献353）、2001年の李龍章「西漢南越王墓“越式大鉄鼎”考弁」（文献197）、2002年の蔣延瑜「漢代鑿刻花紋銅器研究」（文献244）などがある。後二者では中国南半部の諸銅器の特色を示した。1994年の陳文領博「銅釜研究」（文献261）も主に中国南半部で展開する釜について変遷を提示した。陶器では、1981年の姚仲源「浙江漢、六朝古墓概述」（文献483）などが、省単位で容器の変遷をとらえようとしている。1964年の王振鐸「論 漢代飲食器中の卮と觥」（文献301）は、飲器の卮と食器の觥を文献と考古遺物によって同定した論考として、後の研究の母胎の一つになったといえる。春秋期の銅器を対象としたものではあるが、1956年の陳夢家「寿鼎蔡侯銅器」（文献209）は、各種の銅製容器や匕（匙）の器名や用途について研

究したもので、漢代からの銅器研究にとってもバイブル的存在として高く評価できる。

**三国時代～隋** 金属製容器について、省の範囲を超えた研究は極めて少ないが、1989年のB.I. マルシャーク・穴沢咏光「北周李賢夫婦墓とその銀製水瓶について」(文献502)、孫機による1989年の「固原北魏漆棺画研究」(文献376)や1999年の「建国以来の西方古器物の我国における発現と研究」(文献437)、1990年の初師実「甘肅靖遠新出土東ローマ鍍金銀盤略考」(文献377)は西方との比較研究を試みた論功、1996年の尚曉波「大凌河流域鮮卑文化双耳鏤孔圈足釜及相關問題考」(文献490)はいわゆる鍍の編年を行った論考として特記できる。陶・瓷器については、馮先銘による1959年の「略談魏晉から五代に至る瓷器の裝飾特性」(文献292)、「瓷器浅説」(文献297)、1965年の「新中国陶瓷器考古と主要収獲」(文献305)が早い時期の、しかも的を得た研究である。陶・瓷器の編年については、1977年の智雁「隋代瓷器の発展」(文献327)、1979年の李知宴「三国、兩晉、南北朝制瓷業の成就」(文献333)、1983年の魏正瑾・易家勝「南京出土六朝青瓷分類探討」(文献105)、1986年の宋百川・劉鳳君「山東地区北朝晚期と隋唐時期瓷窯遺址の分布と分期」(文献133)、1987年の内丘県文管所「河北省内丘県邢窯調査簡報」(文献367)、1990年の林忠于ほか「福建六朝隋唐墓葬の分期問題」(文献138)、2000年の楊效俊「東魏、北齊墓葬の考古学的研究」(文献269)、2003年の張増午・傅曉東「河南北朝瓷器芻議」(文献277)などがある。

**唐～五代・十国時代** 唐代には銀器や鍍金銀器が多い。1956年の梅原末治「中国古代の金銀器」(文献498)は、中国解放後の研究の最も早い研究成果の一つ。桑山正進による1977年の「1956年来出土の唐代金銀器とその編年」(文献499)や1979年の「唐代金銀器始原」(文献501)は、解放後の中国出土資料に一早く取り組み、しかも西アジアを含めた広い視点から編年して歴史的位置付けも行った本格的な研究である。中国側では、1985年の韓偉らによる『唐代金銀器』が、代表的な資料を集め、しかも唐代を4期に編年した優れた論功。中国ではこれに刺激され、1986年の盧兆蔭「試論唐代の金花銀盤」(文献486)、齊東方による1994年の「唐代銀高足杯研究」(文献488)と1996年の「西安沙波村出土のソグト鹿紋銀碗考」(文献419)、1996年の王維伸「試論日本正倉院珍藏の鍍金鹿紋三足銀盤」(文献262)、1998年の齊東方・張静「ササン式金銀多曲長杯の中国における流伝と演変」(文献186)などが相次いで出来る。1988年の韓偉「飲茶風尚を法門寺出土の唐代金銀器茶具にみる」(文献374)、孫機による1991年の「論 西安何家村出土の瑪瑙獸首杯」(文献390)、それに1996年の「唐李壽石槨線刻“侍女図”“樂舞図”散記(上)」(文献421)なども、中国出土の金属製容器を歴史的に位置づけた研究として高く評価できる。

陶・瓷器では、李知宴による1972年の「唐代瓷窯概況と唐瓷の分期」(文献311)や1981年の「西安地区隋唐墓葬出土陶瓷の初步研究」(文献245)が早い段階の卓見である。三国時代～隋代で取り上げた研究の他に、1980年の長沙市文化局「唐代長沙銅官窯址調査」(文献222)、1982年の周世榮「長沙唐墓出土瓷器研究」(文献225)、1989年の徐殿魁「洛陽地区隋唐墓の分期」(文献231)、1992年の権奎山「中国南方隋唐墓の分区分期」(文献232)などがある。ただし、五代・十国時代は、期間が短いこともあって、広い視野に立った研究は見当たらない。